The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語母語話者の感謝表現 : ストラテジーの種類とその使い分けを中心に
Author(s)	赤堀, 由紀子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1995, 29, p. 49-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56512
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語母語話者の感謝表現

——ストラテジーの種類とその使い分けを中心に——

赤 堀 由 紀 子

1. はじめに

私たちは日常生活において感謝の気持ちを言葉によって伝えることが頻繁にあるが、日本語で感謝を表わす言葉としてまず思い浮かぶのは「ありがとう（ございます）」の類や「すみません」「どうも」といった、感謝の表現として慣用的に使用されている短い表現であろう。しかし、熊取谷(1994)で示されているように、発話行為理論の立場から見れば例えば「本当にお世話になりました」といった表現でも感謝を表せると考えられる。どのような発話が感謝を表現し得るかは、それぞれの言語や社会、文化によって異なるものも共通のものもあるだろうし、さらにその内部には場面差もあるだろう。日本語学習者からは、「ありがとう」などの決まり文句だけでは物足りないような気がするがどのようなことを言えばいいのか分からない、また場面による使い分けができないといった声がしばしば聞かれる。そこで本稿では、感謝行為の遂行のために用いられる言語表現上のいわゆるストラテジーについて、まずそのバラエティーや場面による使い分けという観点から、アンケート調査の結果や自然データをもとに考察を試みる。

2. 資 料

分析・考察の対象とする資料を得るために、大学生・大学院生を対象に

2種類のアンケート調査を行った。アンケートAはストラテジーの抽出のため、アンケートBはその使い分けを概観するために行ったものである。またストラテジーの実際の使用を見る目的で、自然データの一例としてお礼の電話の録音資料を取り上げた。以下にその概要を示す。

(1) アンケートA

〈調査期間〉1993年10月

〈 対　象 〉大阪府内の大学に通う大学生・大学院生　計30人
（女性20人男性10人で、出身地は17府県にわたる）

〈 設　問 〉負担の度合と相手との関係（上下関係・親疎関係）を変数とし、それらを組み合わせて感謝の予想される16の場面を設定して、それぞれの場面でどのような言葉で感謝を表現するかを自由に書いてもらう形式。（設定場面の要約は表1参照）

(2) アンケートB

〈調査期間〉1994年11～12月

〈 対　象 〉大阪府内の大学に通う大学生・大学院生　計30人
（女性15人男性15人で、出身地は18府県にわたる）

〈 設　問 〉15の場面を設定し、代表的なストラテジーの実現例2～3例からなる12の選択肢から、それぞれの場面で言えると思う表現が含まれている選択肢すべてを選んでもらう（複数選択）形式。場面設定の際に変数とした5つの要素と、選択肢の例を以下に示す。（設定場面の要約は表2参照）

【変数】相対的負担の大小、役割行為か否か、発話行為か否か、公的場面か否か、相手との関係（上下・親疎から教官・親しい友人・顔見知りの学生）

【選択肢の例】

選択肢 f.「お手数をかけました」「面倒をかけました」「お世話

表1　アンケートAの設定場面の要約

相　手	設定した場面
ウエイトレス	喫茶店で注文したものを運んできてくれた
教　官	おいしいからと言ってお菓子をすすめてくれた
教　官	旅行予定地のガイドブックを貸してくれた
教　官	ずっと探していた論文のコピーを手に入れてくれた
親しい友人	おもしろいからと言って小説を貸してくれた
親しい友人	旅行予定地のガイドブックを貸してくれた
親しい友人	レポートを手伝ってくれ，締切に間に合った
父　親	おいしいからと言ってお菓子を買ってきてくれた
父　親	映画のチケットをくれた
父　親	旅行に必要なお金を貸してくれた
後　輩	おもしろいからと言って小説を貸してくれた
後　輩	旅行のお土産をくれた
後　輩	試験に関連するノートを全部コピーさせてくれた
未知の人	旅先で道を教えてくれた
未知の人	おいしいからと言ってお菓子をすすめてくれた
未知の人	旅先でスーツケースを運ぶのを手伝ってくれた

表2　アンケートBの設定場面の要約

変　数	設定した場面
利小／教　官 親・友 不親・友	講義後教室を出ようとしたところ，消しゴムの置き忘れを教えてくれた
利大／教　官 親・友 不親・友	課題のパソコン作業中，分からないところを何度も教えてくれ，課題をやり終えるまでつきあってくれた
発話／教　官 親・友 不親・友	自分の留学の歓送会で，個人的に激励の言葉をかけてくれた
役割／教　官	就職希望先に提出する推薦書を書いてくれた
役割／教　官	ゼミでブックレビューを割り当てられた本を貸してくれた
役割／教　官	自分の研究のために探していた参考文献を貸してくれた
役割／教　官	パソコン作業中…
役割／配達人	宅配便の配達人が重い荷物を配達してくれた
公的／教　官	留学前，歓送会でのスピーチでお世話になった教官へのお礼の言葉を述べた
公的／不特定	スピーチで，歓送会を開いてくれたことへのお礼を述べた

になりました」

(3) 自然データ

兵庫県宝塚市在住の60代男性Tが贈り物（食品）へのお礼のために友人（男性）にかけた電話会話（1分35秒）の録音。

3. 感謝表現のストラテジー

3-1. 「ストラテジー」について

どのような表現が特定の発話行為を遂行し得るかという問題は、発話行為研究の大きな興味の対象としてさまざまな理論的、経験的研究で議論されている。しかしこうした発話行為遂行を担う表現を指し示す用語には研究者によって多少の違いがある。

Blum-Kulka (1983) では、ある発話行為は特定の procedure が linguistic realization と結び付くことによって遂行されるとし、意味的な部分である procedure と形式的な部分である linguistic realization をあわせて strategy（以下、ストラテジー）と呼んでいる。Fraser (1981) は、semantic formulae（意味論的定型表現）という用語と共にそれに置き換えられるものとしてストラテジーということばを用いており、謝罪のストラテジーとして「違反への後悔の念の表明（expressing regret for the offence)」など9つを挙げているが、Olshtain & Cohen (1983) は、semantic formula を「特定の意味論的基準（semantic criterion）やストラテジーを満たす単一の単語、フレーズ、又は文で構成される」ものとして捉えている。しかし近年の研究ではストラテジーという用語を Fraser (1981) のような意味で（Blum-Kulka の言う procedure に当たるものに対して）使用するものが多く（Olshtain (1989), Homes (1990) 等)、日本語の感謝発話行為研究においても熊取谷（1988, 1994）がこの意味で「表現ストラテジー」という言葉を使用している。従

って本稿でも、感謝を遂行する表現について考察する上で、発話への実現前の意味的なレベルでの語用論的ストラテジーという意味で「ストラテジー」という用語を使う。

3-2. 感謝表現のストラテジー

日本語の感謝のストラテジーを扱う先行研究には、先にも挙げた熊取谷（1988、1994）があり、発話行為理論に基づいて感謝の慣用表現を主に適切性条件と関連させて考察し、「日本語の『感謝』の表現ストラテジー」として整理している。しかしそこでは感謝の対象となる事物の発生によって相手にかかる負担に対する配慮が感謝の本質的な部分としては認められておらず、その種のストラテジーは含まれていないが、感謝の言葉に対する応答として「いいえ」などの打ち消しの表現が使われることから、筆者は負担も感謝の本質的な一部分として考えたい。また、熊取谷は日本語の感謝の表現を発話行為理論の枠組みと関連づけて議論するためにストラテジーを大別的に整理しているが、筆者のように日本語教育への応用を考える上ではストラテジーの細分類の必要を感じる。以上のことから、熊取谷の「表現ストラテジー」を参考にしながら、アンケートを用いて細分類足等を行って発展を試みた。アンケートAの結果からは以下のようなストラテジーが見い出された。回答例（一部作例）とともに示す。

《感謝表現のストラテジー》

1．感謝行為に関する言及

a．感謝する旨の表明　e.g.「ご協力に感謝します。」

b．感謝の必要性の表明　e.g.「あなたには感謝しなくちゃね。」

c．感謝の意志の表明　e.g.「昨日のお礼を言いたくて。」

d．感謝の方法を知らない旨の表明　e.g.「何とお礼を言えばいいのか。」

2．心的態度の表明

a．驚き・喜びの気持ちの表明　e.g.「いやー、うれしいわー。」

b．感謝の気持ちの直接的表明　e.g.「ありがとうございます。」

c．恐縮の念やすまないという気持ちの表明　e.g.「すみません。」

3．感謝の対象事物への言及　　e.g.「私にまで気を使ってくれて…」

4．負担に関する言及

a．相手の負担への言及

e.g.「これ手に入れるの大変だったんじゃないですか。」

b．負担をかける／かけた旨への言及　e.g.「お手数かけました。」

c．行為・気遣いの不必要性への言及　e.g.「気使わんでもええに。」

5．利益に関する言及

a．利益内容への言及　　e.g.「やー、何とか間に合ったわー。」

b．利益の有効利用に関する言及　e.g.「ぜひ参考にさせて頂きます。」

6．返恩の申し出　　e.g.「今度晩飯おごるわ。」

7．プラス評価

a．相手自身へのプラス評価　　e.g.「さすがー、お父さん。」

b．関係事物へのプラス評価　　e.g.「おもしろそうやなー。」

c．念願の事物である旨の表明　e.g.「あ、これ見たいなー思っててん。」

8．相手（またはそのウチの人物）が授益者であることの明示

a．利益のもたらし手の明示　e.g.「あんたのおかげよ。」

b．相手の存在、行為の不可欠性への言及

e.g.「○○ちゃんがいなかったら間に合わなかったよ。」

上記のストラテジーのうち、「1.感謝行為に関する言及」ストラテジーは熊取谷（1988、1994）でその存在が指摘されているが、アンケートAの回答からは使用例が観察されなかった。しかし、この手の発話が感謝表現のストラテジーとして使用されていることは自己の内省からも明らかだと思われるので、熊取谷で取り扱われているものを参考にしてストラテジー

群に含めることにした。（従って1のストラテジーに付けた例だけはすべて作例である。）今回このストラテジーが観察されなかった理由を考えて見ると、その原因はアンケート調査で設定した場面の性質にあると思われる。つまりこのストラテジーの使用は、のちに触れるが特定の場面に片寄って現われる傾向があり、今回のアンケート内の設定場面にはそうした場面が含まれていなかったということである。このことから、ストラテジーによって使用の場面適切性に傾向の差がある、すなわち個々のストラテジーは使いやすさ、汎用性において同等ではないということが窺われる。

また、今回ここに列挙したストラテジー群は、必ずしも日本語母語話者の感謝表現に使われるストラテジーのすべてを網羅しているわけではないということにも言及しておきたい。このリストは一部を除いて大学生ら30人に対する小規模なアンケート調査の結果から得られたものなので、他にも別のストラテジーが存在するということは十分に考えられる。例えば冗談口調などの調子（key）の問題も考慮に入れれば、実際にはこのリスト上のストラテジー群には収まり切らない様々な発話によって感謝が表現されているであろうが、その種のものはここでは考察の対象外とした。

3-3. ストラテジーの共起

アンケートAは自由記述式をとったが、その回答には単一のストラテジーだけによるものと複数を組み合わせて使っているものがあった。単独で用いられる場合は、慣用表現を使って「感謝の気持ちの直接的表明」をする「2. b」に属する「ありがとう」類（「ありがとうね」「ありがとうございます」等）が大多数を占めており、ストラテジーが併用されている場合もやはりほとんどすべてに「2. b」が次のような形で含まれていた。

$X+2.b$　または　$2.b+X$　または　$X_1+2.b+X_2$

（X_n は1つあるいは複数のストラテジー）

「2. b」の含まれない併用例は今回のアンケート結果の場合、非常に少なく、回答数450中9例しかなかった。(しかも相手は父親や親しい友人、後輩に限られていた。) このことは、感謝が「2. b」を中核とする立体的な発話行為であることを窺わせる。

4. ストラテジーの使い分け

アンケートAの結果を見ると、各場面に対してすべて単一の同じ表現形式だけで回答した人は皆無で、回答者全員が場面によってストラテジーを使い分けており、利益・負担が相対的に大きな場面ほど発話が長くなっていた。また先に触れたように個々のストラテジーは汎用性において等しくないということも見えてきた。そこでストラテジーの選択について大まかな傾向をつかむために行ったアンケートBの結果を分析する。表3は結果を、場面(横列)については選ばれたストラテジー数の多い(つまりより多様なストラテジーが使用可能な)場面ほど左に、ストラテジーの種類(縦列)については選ばれた回数の多い(より汎用性の高い)ものほど上に来るように配置したものである。(斜線の網かけは半数以上の人が選んだもの。) まず場面の性質から見てみると、利益・負担が相対的に大きい場面、公的場面(スピーチ)では多様なストラテジーが使用可能であるのに対して、利益・負担が相対的に小さい場面や発話(ここでは激励の言葉)に対しては選択の幅が狭い、つまり定型性が高いということが分かる。これはアンケートAで見られた発話の長さにも関係がある。長い発話で感謝を表現する必要があれば多くの場合それだけ使用するストラテジーの数も増えるので、ストラテジーのバラエティーにも豊富さを要求することになる。またもう一つ興味深いのは、「役割行為」(金田—1984)の捉え方の違いである。役割行為とは二者間の役割関係から当然とされる行為のことである。何を役割行為とみなすかには個人差があるにしても、人間関係に

より配慮の必要な「教官」に対してと接触がその場限りと想定される宅配便の「配達人」に対してでは明らかに感謝のし方に差が見られる。

次にストラテジーの使いやすさに目を向けると、「ありがとう」類が群を抜いて汎用性が高いこと、「すみません」類（「すみません」「すみませんでした」等）が他と比べて変則的な分布を見せていることなどが注目される。「すみません」は疎、目上の相手に対して、利益の大小に関わらず使用可能であることが分かる。また、「プラス評価」が予想に反して低く位置しているが、これは設定場面に具体的なほめる材料が含まれているものがなかったためではないかと考えられる。

表3　場面によるストラテジーの選択

		設定した場面															
		利大／不親	利大／教官	利大／親友	公的／不親	公的／教官	役割／教官	役割／教官	発話／教官	役割／教官	利小／不親	利小／教官	発話／親友	利小／親友	発話／不親	役割／配達	小計
ストラテジー	「ありがとう」類	29	29	28	27	26	29	27	28	25	27	26	30	29	30	24	414
	感謝対象への言及	21	24	18	27	26	20	24	12	29	10	9	7	6	10	4	247
	利益に関する言及	27	23	24	7	19	13	20	8	10	9	10	8	8	5	0	191
	負担に関する言及	18	24	9	1	19	27	11	3	5	0	1	3	0	0	13	134
	「すみません」類	18	16	5	1	0	10	14	0	7	20	22	0	6	0	6	125
	心的態度（喜び）	5	2	9	19	13	1	2	8	0	7	3	13	13	6	0	101
	プラス評価	12	8	10	22	0	5	3	10	1	0	0	4	0	5	0	80
	感謝行為への言及	2	5	5	10	12	1	2	8	0	0	0	4	0	3	0	52
	返恩の約束	9	0	17	6	3	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	37
	小計	141	131	125	120	118	107	103	77	77	73	71	69	63	59	47	1381

利大／小：利益・負担が相対的に大きい／小さい　　公的：公的場面
役割：役割行為　　不親：親しくない友人　　親友：親しい友人

5.　電話会話の分析

次に、自然データを資料に、今回アンケートから得られたストラテジーが妥当なものであることを確認しながら、実際の会話の中でどのようにし

て感謝が表わされているかを、ストラテジーの使われ方を中心に観察してみる。資料とした電話会話中に現われた感謝の発話を出現順にストラテジーで示すと次のようになる。なお（　）内はストラテジーのリスト上の番号、○数字は本文末の書き起こし資料の二重下線部分のものに相当する。

①感謝の必要性への言及　（1 b）
②利益の有効利用への言及　（5 b）
③感謝の気持ちの直接的表明（2 b）
④感謝の気持ちの直接的表明（2 b）
⑤関係事物へのプラス評価　（7 b）
⑥感謝の気持ちの直接的表明（2 b）
⑦関係事物へのプラス評価　（7 b）＋感謝の対象への言及（3）
⑧感謝の気持ちの直接的表明（2 b）

5-1.　ストラテジーの選択

どのようなストラテジーが選ばれているかを見てみると、電話という場面性と感謝の対象物の性質を反映した選択が行われていることが分かる。電話の場合、感謝の対象事物は両者の眼前にはないので、感謝表明の意志と感謝対象が何かを伝える必要がある。そこでTの場合は「感謝の必要性への言及」の発話をもって感謝を表わしたいという用件を伝え、後に「対象事物への言及」の発話もしている。こうした目的は「感謝の対象事物への言及」だけでも果たせるだろう。また感謝の対象事物が食品の贈り物という具体的物質であるので、「プラス評価」「有効利用」ストラテジーを使用し、贈り物が自分にとっていかに価値あるものであるかを表現することで感謝の気持ちを伝えようとしている。

5-2. ストラテジーの現われ方

上のように、この約1分半ほどの短い会話の中に、感謝を表わす発話と解釈できるものが全部で8つ見い出せ、ストラテジーの種類数は5種類に及んでいる。また同一ストラテジーの反復的な使用も見られる。「おいしい」という贈り物への評価を表わす「7 b.関係事物へのプラス評価」が2度現われているほか、「2 b」のストラテジーはすべて「ありがとうございました」「どうも」類の発話だが、これが他の感謝表現やその他の発話の間にはさみ込むように4回現われている。これは何度も重ねて使用することで感謝の気持ちを強調しているものと考えられる。

5-3. 考 察

感謝するという行為は一言では済まされず、そこにはやりとりのプロセスが存在することが、アンケートと自然データを通して明らかになった。特に電話の場合は一定時間以上は会話を持つ必要があり、お礼のためにかけた場合は比較的長い時間お礼の話題を持続させるので、必然的に多様なストラテジーによる感謝表現が必要になる。また、強い感謝の気持ちを伝えるために、やりとりの中で同じような内容や「ありがとう」を繰り返すが、日本語学習者からよく聞く「同じことの繰り返しでくどい」という印象は、日本人のお礼の場合ここに起因するものと考えられる。対面の場合と違って表情などによる助けが期待できず、多種多様なストラテジーの使用やこうした独特なやりとりの技術が要求される電話でのお礼の会話は、日本語学習者にとって対面の場合以上に難しいのではないかと思われる。

6. お わ り に

本稿では、日本語母語話者の感謝表現のストラテジーに焦点をおいて考

察を試みた。まずアンケート結果をもとに感謝表現のストラテジーのリストを作り、そうしたストラテジーがどのように場面によって使い分けられているかを概観し、報告した。そこでは、それぞれのストラテジーは汎用性において階層的で、例えば「プラス評価」のストラテジーは具体的な誉める対象がある場合に使われる、公的場面や感謝の対象事物の負担・利益が相対的に大きい方が使用可能なストラテジーの幅が増えてくるなど、場面や感謝の対象事物の性質などが選択に制限を与える要因として働くことが分かった。電話会話の分析では、アンケートから抽出したストラテジーが実際に使われている妥当なものであることを確認するとともに、短い会話のなかに多彩なストラテジーを盛り込み、また同じ内容や発話を繰り返しながら感謝を表現している様子を観察した。

しかし今回のようなストラテジーに関する考察だけでは日本語母語話者の感謝表現を十分把握できたとは到底言えない。電話会話の観察からも感謝という行為が単一の発話のみではなくプロセスを持っていることが明らかになった。今後は一つの発話単位を超えた、やりとり、会話といったより大きな視点からの検討を試みたいと考えている。

【電話会話資料】 T→I （T：60代男性 ／I：男性、Tの友人 ／電話の第一用件：贈り物へのお礼 ／会話時間：1分35秒）

T：　　あー、I、Iさん。　　どうもどうも。　　や、
I：もしもし。　　おー（笑）。　　やーやーやー。

T：昨日ねえ、　ぼかーあのー、ちょっと田舎へねー、用事で、てあのー
I：　　おー。　　おー。

T：帰ったんだけども、その出かける前にちょうど荷物着いてねー。
I：　　ほーほー。　　ほー

T：　　おー。ほんで早速あんたに電話入れたんだけども、こご不在

I：ほーほー。

T：のようだったな。　でしょ。　　おーおー。

I：あーあー。　　おらんかったでしょう、きっと。　夕方

T：　　あー。　　あ、なるほどそうで

I：4時ー前、3時半ごろから出と、出とったけんね。

T：しょ。何回か出る前までね、　やったんだけど今、ほいて今帰って

I：　あー。　　あー、あー本当。　　じゃ。

T：きたんですよ。　　おー。　①ほいで早速こりゃあのー、

I：　　あらら一本当。　やーやー。　　いやや(笑)

T：お、　おー、あーあのーお礼の、電話入れないかん思てね、ろん。

I：　お。　　電話。　　×××かよ

T：　　おー、②だからあのー仏さんにね、　　ちょうど、あのー

I：かったわね。　　おーおー。

T：内の、親元と、で姉の家へちょっと用事で行ったもんだからね、むこ

I：　　おん。　おーおー。　おーおー、おーおー

T：の仏さんに飾って。　　ほいてーこんなことやゆうてね、　お、

I：　　お。　ほーほーほ。　　ほー。

T：もらったこれ、仏さんに飾らせてもらいましてね。　　おー。

I：　　ほーほー。　　えーえーえー。ごよ、はい

T：③どうもどうも本当に。　④ありがとうございました。おー、⑤また今

I：はい。　　いやいや。　　あ。

T：年はまた特別おいしくて。　　ねー。　　そーそーそーそ

I：　　お、そーそー。　甘味が強いけね。　おーお

T：ーそー、これあれややっぱり雨のせいでってなんか新聞にも載っとっ

I：ー。　　そーそーそー。

T：　た　けども。⑥ほんとにありがとうございました。　　あ、

I：おーおーおん。　　いやいやいや。　いーやいや。　ほん

T：また。　いいえ、とんでもないですまたおいしいものまたごちそう

I：の気持ちで。　はい。　　はいはい。　いや。

T：になりまして。　　元気や元気や。　　あー、

I：　　みんな元気かいな。　　あー、あーそりゃええわ。　は

T：今ー、下の息子の用事でね、　　い、行っとったもんだから。

I：い。　　うんうん。　　あらら本当

T：おー、そんなことで。　あ。　　ど、　あ、⑧ありがとう

I：　　はい。　　あーは。　やーわざわざどうも。はい。

T：ございました、ほんなー奥さんによろしくねー。　　あ。

I：あのーまた　お。　　はい。　はいはいー。奥さんによろ

T：　　はいはい、どうもどうも。　　はいー。

I：しく、はい。　　ありがとうございましたー。

参考文献

Blum-Kulka, S. & Olshtain, E.: "Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns." *Applied Linguistics* 5-3 (1984)

Fraser, B.: "On Apologizing" In: Florian Coulmas (eds.) *Conversational Routine.* (The Hague: Mouton Publishers) 1981

Homes, J.: "Apologies in New Zealand English." *Language in Society* 19 (1990)

金田一秀穂「お礼とお詫びの言葉」『言語』16—4 (1987)

熊取谷哲夫「発話行為理論と談話行動から見た日本語の『詫び』と『感謝』」『広島大学教育学部紀要』第2部37号 (1988)

熊取谷哲夫「発話行為としての感謝 ── 適切性条件、表現ストテラジー、談話機能 ── 」『日本語学』13—7 (1994)

Olshtain, E. & Cohen, A. D.: "Apology: A Speech-act Set." In: Wolfson, N. & Judd, E. (eds.) *Sociolinguistics and Language Aquisition.* (Newbury House Publishers) 1983

Olshtain, E.: "Apologies Across Languages" In: Blum-Kulka, S. et. al. (eds.) *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies.* (Ablex publishing Corporation) 1989

Searle, J. R.: "Indirect speech acts." In: Cole and Morgan (eds.) *Syntax and Semantics.* Vol. 3 (New York: Academic Press) 1975

山梨正明『新英文法選書12　発話行為』(大修館書店) 1986

(大学院後期課程学生)